

親亀神社の由来：

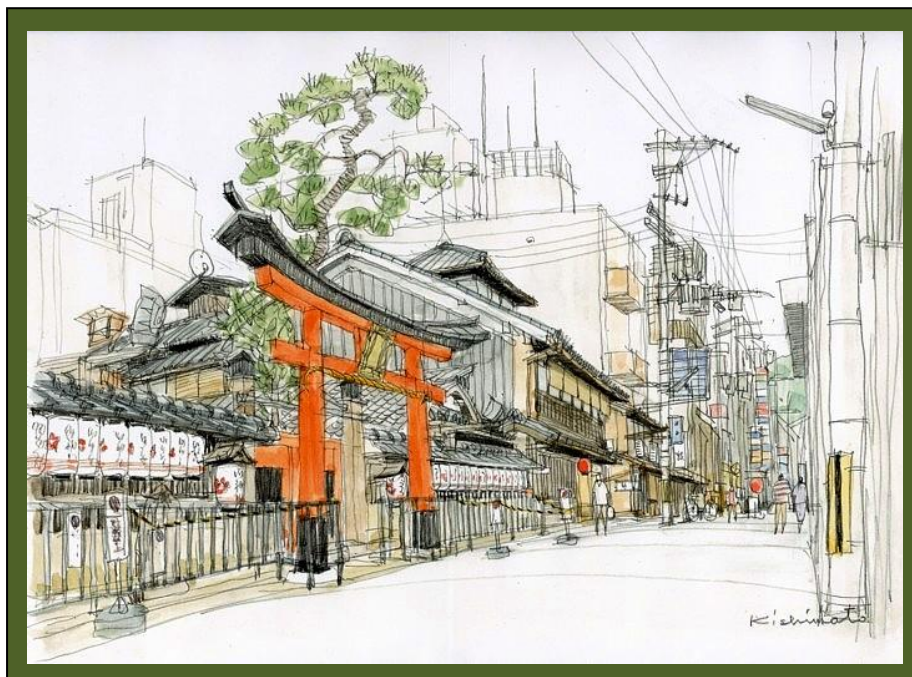
ご祭神 加具都智命(かぐつちのみこと)
 宇賀御魂命(うかのみたまのみこと)

祇園東一帯の氏神様として親しまれている親亀神社(正式には親亀稻荷神社[かんかめいなりじんじや])は、靈験あらたかな火伏せの神様を祀っています。

祇園東花街は、近江国膳所藩(ぜぜはん 今の滋賀県大津市)の京屋敷跡一帯に位置し、元々その藩邸の中庭に設置されていたのが、亀と狐の伝説のある親亀神社です。創建当時付近は竹藪で、これを伐り開く時に亀が現れて飲んだと言い伝えられており、親亀、飲亀または歓喜神社と名付けられたそうです。その後、(恐らく稻荷神を合祀したために)親亀稻荷社と称するようになりました。

膳所藩京屋敷は、東は今の東大路、西は花見小路、北は新橋町通り、南は富永町通りに囲まれた約四千三百五十坪で、第二代藩主・本多俊次(ほんだとしづ 1595~1668)が、幕府よりこの地を賜ったのは万治二年(1659)十月のことでした。膳所藩は江戸初期より京都御所警備を担っておりましたが、それから約五十年後の宝永六年(1709)、時の藩主・本多康慶(ほんだやすよ 1647~1718)は、郡山・淀・亀山藩と共に御所の火の番(火元管理)を將軍より仰せ付かって京詰めとなり、この四藩が臨月交代で幕末まで京都のお火消役を勤めました。

康慶の子・康命(やすのぶ 1672~1720)は、「御所の火の番である膳所藩が火を焚くには恐れ多いから、火伏せの神・遠州(えんしゅう 今の静岡県)秋景山の秋景権現を勧請せよ」という父の遺言によって膳所藩内の茶白山(ちやうすやま)に秋景権現を勧請しましたが、享保三年(1718)にさらにその分霊を京屋敷内に移祀したのが親亀稻荷社です。



岸本信夫「民家と町並みスケッチ紀行」より

親亀神社あたり(京都市東山区祇園町北側)10.09.12

この画像に関するお問い合わせ先:[<http://www.eonet.ne.jp/~kishimoto-sketch/>]

「ぎおん楽宴小路」の東側に赤い鳥居とお茶屋の建物があり、その組み合わせが面白いと思つた。神社は「親亀神社」で「歓喜神社」との別名もあり、防火の神さままだそうだ。その隣は「中勇」というお茶屋。スケッチした場所には「中末吉通り中小路東入ル」との住居表示があつた。しかし、町名は「祇園町北側」で、「中末吉通」は「新橋南通」とも呼ばれ、ややこしい。

画・文 岸本信夫

当ページ掲載の画像等の無断転載及び2次加工は禁じられています。